



近森会グループ

発行 ● 2010年1月25日

びろっば

2

Vol.283

www.chikamori.com 〒780-8522 高知市大川筋一丁目1-16 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者●近森正幸/事務局●川添晃

「社会医療法人近森会」の発足

このたび近森会は高知県内で初めて「社会医療法人」に認定され、昨年12月25日県庁で認定書の交付式が行われた。これにより公益性の高い病院として位置づけられ、急性期医療、なかでも救命救急、災害医療における地域での役割が期待される。

社会医療法人近森会 理事長 近森正幸



公益性の高い「社会医療法人」

「社会医療法人」は平成19年4月の医療法改正に伴って創設され、実質的にはその一年後から実施された極めて公益性、非営利性の高い医療法人です。その目的は、地域において良質で効率的な医療を提供する体制の確保を図ることにあります。

「社会医療法人」に認定されるためには、「救急」「災害」「僻地」「周産期」「小児救急」の五つの医療分野のいずれかで、一定の実績を挙げることや透明性の高い病院運営など、厳しい要件が求められています。

「社会医療法人」の運営にあたっては、同族性を排し、出資持分のない公益性の高さが求められます。こうした要件を満たすことで、通常の診療業務（医療保険事業）の法人税などが非課税となり、営利事業も一定の範囲内で認められ、医業経営の継続性の面からも優遇されることになります。

創立当初からの必然

近森会は昭和21年に前理事長である父・近森正博が「近森外科」を開業したことに始まります。どうすれば不必要な医療を行わずに済むか、患者さんにとっていい医療を行っていくためにはどうすればいいかをいつも考え、父は毎晩のように病院に泊まりがけで、夜も昼もなく仕事に取り組んでいました。その後、いくつもの会社のトップを経験していた野村好直氏を事務長に迎え、二人で葛藤しながら徐々に「近森家の近森病院」から「医療法人近森



会の組織としての近森病院」に切り換えていきました。いま振り返ると、個人経営からより組織的な病院経営へ、いかに転換するか心に砕いてきた歴史がうかがえます。

60余年を経た今日まで近森会を律してきたのは、そんなエネルギーに満ちた迫力ある創立者としての医療や病院運営に取り組む姿勢そのものであったと思います。このたび、「社会医療法人」の認定を受けることができたのも、創立当初からの歴史の流れの必然であったように思えてなりません。

これまでの近森会の実績

近森病院はこれまで高機能な急性期病院として地域医療連携をすすめ、平成15年2月には地域医療支援病院の認可を受けました。昭和39年の救急病院告示を受け、半世紀にわたりERとして軽症から重症の患者さんを選び好みせず積極的に受け入れ、救急の質・量ともに高知県でもトップの実績を積み重ねてまいりました。また、阪神・淡路大震災の後、災害支援病院として、災害医療派遣チーム（DMAT）を編成し、病院内外の防災活動へ積極的に参加し

ており、昨年9月にはこれまでの実績から、災害拠点病院に指定されました。こうした実績をふまえ、本年1月1日付で「救急」および「災害」の分野での医療活動の実績と経営の透明性が認められ、高知県知事より「社会医療法人近森会」として認定を受けることができました。

政権が変わったからといって、急に社会情勢が良くなるわけでもなく、多少の緩みはあっても中長期的には低医療費政策の流れにも変化があるとは思えません。今後も、枠にとらわれない自由な民間病院の活力を忘れることなく、常に時代のニーズを捉え、地域になくてはならない病院としてあり続けたいと願っております。

良質で効率的な医療の提供

今年からは近森病院の全面増改築をはじめとする5年にわたる壮大なプロジェクトが始まります。ヘリポートを有する新本館（仮称）や陸橋で結ばれた外来センター（仮称）など、将来の高度急性期医療に充分対応できるハードを充実し、高機能の急性期病院として救命救急・災害医療が適切に行える病院へ大きく変わろうとしています。

将来、巨額の補助金で維持されている国公立病院を中心とした地域医療体制ではなく、いくつかの「社会医療法人」を核として、地域の医療資源の集約化が進み、良質で適切な地域医療を効率的に提供する体制を構築することができればと、夢見ております。

第61回 地域医療講演会

これからの医療政策を考える

2009年12月18日(金)、高知パレスホテルで慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授の田中滋先生をお招きして「これからの医療政策を考える」をテーマに、地域医療講演会が開かれた。



ハートセンター・心臓血管外科部長 入江 博之

田中教授の医療政策への影響力

田中教授は経済学を基礎とする医療政策、および高齢者ケア政策を専門とされ、社会保障審議会医療部会、中央社会医療協議会、日本医師会医療政策会議等にて部会長や議長を務めておられます。また日本ヘルスサポート学会理事長、医療経済学会理事、さらに協会けんぽの運営委員長の重責も担っておられます。その他、内閣府や経済産業省、厚生労働省等、政府関連の委員や座長を多く兼務しておられ、日本の医療政策に大きく影響を与える立場におられます。

医療を巡る誤解

今回はまず我が国の医療を巡る誤解をお話し下さいました。「医療費は高騰している」、「高齢化が原因で国債発行高が増加している」、「他分野の質を削って医療費に廻せばよい」「税、社会保険料負担が低い方が国民生活に有利である」といったことが我々の誤解であると明確に指摘されました。

医療費対国民所得比が7.57%から9.11%に増加しているといわれています。これは医療



写真は2枚ともオフィシャルカメラマン山崎啓嗣

費の増加分も確かに1.67%とありますが、大きいのはその分母となる国民所得の減少が原因であることが示されました。これは医療界の責任ではなく、マクロ経済の失敗がその主原因とのお話でした。

この医療費の増加は医療技術の高度化、また高齢化により高齢者の絶対数が増えたためです。それでもなお、日本の医療費をGDPとの比率でみるとOECD30カ国中22位と下位であり、日本より下にはメキシコや元東欧諸国があるのみで、その他のいわゆる先進国は全て日本より上位に位置しています。

社会制度の低負担、低福祉への移行

日本の社会制度の限界が見えてきているともいわれました。これは、国

民健康保険を例にとると、日本の約8000万世帯中、保険料滞納をせざるを得ない家庭が約400万世帯にも増加しているからです。つまり経済的理由により、社会保険制度についてこれられない方が増えているということです。低社会負担は低給付であります。このために利用格差が生じ、社会が不安定となり、極左や極右の台頭の恐れがあります。税社会保険負担と福祉水準は従来は中負担、中福祉でありましたが現在の日本は低負担、低福祉へと移行しています。

公益性の高い社会医療法人の整備

信頼に支えられた医療を守るためには社会が支える医療、医療が支える社会の構築が必要となります。信頼される医療提供制度は患者、住民との共同生産となります。信頼を獲得するためには専門医制度の充実、また公益性の高い社会医療法人等の整備が今後必要となるとのお話でした。

文字にすると難しく感じられますが、噛んで含めるようにお話し下さり、経済学を学ばなかった医療従事者にもたいへん分かりやすい内容となりました。

医療政策への関心の高さ

当日は12月中旬の金曜日の夜という、忘年会たけなわの時期にもかかわらず、100人を超える方々が出席して下さいました。会場に入りきれず一部立見の方もおられました。

講演後の質問もたいへん活発で質疑応答に30分を要し、終了予定時刻を大幅に遅れてしまいました。講演後にいただいたコメントでは「一回だけではもったいないのでシリーズでお話を伺いたい」とのお声もありました。

医療の現場で従事している者としては、大きな視点からのお話を伺うことができ、たいへん有意義な講演会であったと思います。



噛んで含めるように話された田中教授

2月の歳時記

チューリップ

検査部 久保 安由美

2月の誕生花チューリップは、愛を告白する花として有名な誕生花だそうです。花言葉は、愛の告白(赤)、新しい恋(白)、実らない恋(黄)、疑惑の愛(斑)などで、色によって違うそうです。

チューリップは色も豊富ですが、花びらの形も面白いものが多い花で



す。珍しいチューリップを贈って、相手を驚かせてみてはどうでしょうか。



画・総務課(広報担当) 鍵本由紀

近森リハビリテーション病院設立 20周年記念講演会

「今までとこれからのリハビリテーション医療」



記念講演中の石川誠先生

2010年1月9日(土)、高知新阪急ホテルにおいて医療法人輝生会・新誠会理事長石川誠先生を講師にお迎えし、近森リハビリテーション病院設立20周年記念講演会が行われ、約400名にご参加いただきました。

近森リハビリテーション病院立ち上げ当時のエピソードを交えながら、現在のリハビリテーション医療の課題、リハビリテーションに関わるスタッフ

感謝状が贈られました。

財団法人結核予防会および高知県総合保険協会より今年1月12日、結核予防事業募金に貢献したとして、感謝状が贈られました。



リハビリテーション中心の総合的ケアを実践しておられる輝生会・新誠会理事長の石川誠先生のご講演は、「近森で行なったことの再現を現在行なっている」と、近森リハスタッフへの力強いエールから始まった。

近森リハビリテーション病院事務長 内田 陽子



の心得などをわかりやすく、お話いただきました。

回復期リハビリテーション病棟が制度として認可され、今年で10年、「質」が問われる時代になってきました。回復期リハビリテーション病棟のモデル病院となった近森リハビリテーション病院がこれからも全国のトップグループとして走り続けるためには、明確な理念を実践できる能力と経営感覚、そして何よりも「人の和=チーム」が大切であるということに改めて感じた講演会でした。

また祝賀会には、開設当時のメンバーも多数出席してください、大同窓会のような和やかな会となりました。開設当時の「ひろっば」記

事を集めた記念誌や、昨年よりプロジェクト委員会を立ち上げ作成していた20周年記念DVD、20年間の写真を集めたスライドショーも楽しんでいただき、当時の話で盛り上がりました。20年の歴史・礎を築いてくださった諸先輩方からお話を伺い、近森リハビリテーション病院のスタッフであることを誇りに思いました。諸先輩方から近森リハビリテーション病院へのエールをいただいたような、とても素敵な時間でした。



会場風景・撮影はオフィシャルカメラマン山崎啓嗣

聴診器と私

身体を聴診器代わりに

近森リハビリテーション病院4階東病棟看護師長 小松 祥子

新人の頃、恥ずかしさと誇らしさを少しずつ感じながら、聴診器を首からぶら下げ廊下を歩いていたのを思い出します。人が生きていくうえで発する音に感動し、不必要に聴診器を耳にあて聞いていましたが、今では管理職となり聴診器が活躍することはほとんどなくなってしまいました。

近森リハビリテーション病院で

は、身体を聴診器代わりにし、耳で聞いて、目で見て、手で触れて、雰囲気を感じ、と、身体全体を使って、患者さんや家族の状態や思いを感じることが大切です。さらに看護職として、患者さんの身体的な異常を聴診器を使い、早期に発見することも重要だと思っています。

聴診器は肌に触れる物なので、いつもきれいにしておくことが大事だ



と思っていますが、同じように気持ちよく人と関わることができるように、私自身さまざまな面でいつもきれいな状態でいたいと思います。

25年以上継続する事例検討会



近森病院第二分院看護部長 松永 智香

約25年前、精神科看護に憧れ、近森病院第二分院の看護師として就職した。当時の師長は、梶原和歌統括看護部長、直属の上司は当時看護部長をしていた和田廣政事務長であった。就職に関して、私の意思決定を支えたのは、日本精神科看護技術協会の仲野栄常務理事（当時は、社会復帰部主任）、そして、国際看護師協会（ICN）の南裕子会長（当時は高知女子大学精神看護学教授）が事例検討会のアドバイザーとして来ておられたことだった。なんて、すごい方々！

2年間で精神科を離れ、3年前に20年ぶりに帰ってきたら、事例検討会健在。野嶋佐由美教授（現高知女子大学看護学部長）から、梶本市子教授（現高知医療センター看護局長）、そして現在の畦地博子教授へとバトンタッチされ、第二分院看護部教育担当の山下ちぐさ師長（畦地教授と同級生）が事

例検討会を担当し、毎月開催し続けている。

事例を通して看護を振り返り、患者さんやご家族が“もっと満足できる看護”を提供できるように、スタッフが自己研鑽する時間。事例提供するプロセスでは、看護を振り返る力、問題点を明確にする力、文章をまとめる力、言語化する力、倫理的配慮などのトレーニングを行う。また、検討するプロセスでは、理解する力、共有する力、聴く力、質問・提案する力、問題解決する力、内省する力などのトレーニングができる。

事例検討会に参加したスタッフたちは、「頭の中が整理できる」「自信を持って看護ができる」「視野が広がる」「患者さんをより深く理解することができる」など、充実感と満足感が窺える。新人看護師からベテラン看護師まで、それぞれの学びを得ることができる事例検討会。スタッフたちが、“キラリ”と輝くのが見える大切な時間。

リレーエッセイ

趣味で老け防止に一役！

近森オルソリハビリテーション病院
医療相談室 山岡 由佳



先日、ドクターから不意に質問を受けました。「歳を取っても出来る趣味はあるの？」その場に居たスタッフが皆、顔を見合わせ無口になってしまいました。

患者さんに「日中どのように過ごされて居ましたか」と、よく質問をします。家庭菜園、短歌、編み物、旅行、釣りなど、いろんな返事が返ってきます。

ふと自分の趣味を考えてみると、今しかできない趣味しか思い付きません。通勤徒歩10分の距離を自転車移動している私が、唯一するスポーツがスノーボードです。人一倍寒がりな

私の趣味がウィンタースポーツとは、矛盾しているようですが……。誰も足跡をつけていない真白い雪の上に、初めてつける自分の足跡。その感覚が大好きで、寒さも忘れるのです。ただ日焼けだけは怖いので、真白になるくらい日焼け止めクリームで対策しています。少し良いこともあって、ダイエットには一役かっています。たぶん……。

始めてから7年になります。写真に写っているのは、数年前。今では道具が次々増え格好だけは一人前ですが、肝心の腕前はというと、転んでは起き、転んでは起きる七転び八起き。まさに人生そのもの!!

しかし、楽しめるのも体力のある今のうちですね。ドクターから言われたように、歳を取った時、趣味があるのと無いのとでは老けるスピードも変わるかも知れません。数十年後、一日中テレビを見て過ごすだけ、なんてことがないように、私もこれから長い間楽しめる趣味を見つけていきたいと思ひます。



管理部長の こだわりヘルシー美食

管理部長 川添 昇

今年の正月は寝正月でゆっくり本を読むことができた。村上春樹のベストセラー『1Q84』は20年あまり前に読んだ『ノルウェイの森』以来である。主人公は男女ふたりであるが、男の方は一人アパート暮らしであり、彼の食事作りのシーンが気になってしまった。柔道の有段者である彼の食事がいかにもつましやかで、不思議な感じである。今流行りのまるで草食系。夕食なのに「わかめとネギの味噌汁、鰹の干物、冷奴に野菜の煮物、かぶの漬け物、梅干と炊きたてのご飯」という具合である。

そこで文中のイケそうなレシピを紹介したい。

「海老と野菜炒め」



画・臨床栄養部科長 吉田 妃佐

〈作る〉

1. たくさんの生姜を細かく刻む
2. セロリとマッシュルームを適当な大きさに切る
3. (チャイニーズ) パセリも細かく刻む
4. 海老の殻をむき、水道の水で洗いペーパータオルに並べ水気を取る
5. フライパンに白ごま油を入れ1を細火でゆっくり炒め
6. 2を5に投入し、強火にして炒め続け塩コショウを軽くし、火が通り始めると
7. 4を投入 もう一度塩コショウをし、小さなグラスに酒又は白ワインを注ぎ、さっと薄口醤油をかけ3をまぶす

〈食べる〉

主人公は一本半のビールで食したが、私は少しはりこんでスパークリングワインにした。



出張報告

アジア胸部外科学会で発表



近森病院心臓血管外科科長 池淵 正彦



アジア胸部外科学会で講演中の著者

昨年10月27日に、ソウルで開催されたアジア胸部外科学会で発表する機会を得ました。

発表した演題は「Early and Late Results of Mitral Valve Annuloplasty for Ischemic Mitral Regurgitation」で、虚血性僧帽弁閉鎖不全症の治療成績です。国際学会での発表は1999年にオーストラリアで発表して以来、10年ぶり5回目です。今回はアジアの学会だったのですが意外と日本人の発表者は少なく、開催国の韓国を筆頭に中国、シンガポールなどの東アジアからトルコなどの西アジア、ヨーロッパ、アメリカなどからの参加がありました。

胸部外科の学会だったので、心臓血管外科だけでなく呼吸器外科もたくさんのセッションがあり、一部には食道外科のセッションもありました。たまたま、私が鳥取大学で研修医のときに私の指導医だった呼吸器外科の先生（私の入局した医局は心臓外科、血管外科、呼吸器外科、乳腺内分泌外科を担当していました）も演題を出しておられましたので、お互いの発表を聞き、また、ほんとうに久しぶりに一緒に食事をする機会もできました。鳥取から高知へ来て7年、呼吸器外科と心臓血管外科とに分かれて進むこととなり、国内でもめったにお目にかかることもないなかで、外国の学会でお会いするとは、想定外の嬉しい偶然でした。

ソウルへは初めて行きましたが、時差もなく、フライト時間も短いため、感覚的には国内出張と大差ありませんでした。ただ、この学会までの日程が非常にハードであり、9月中旬に母が他界し、悲しみも覚めぬうちに10月13日には心臓血管外科の国内最大の学会でも発表をし、15日から入江部長がヨーロッパの学会へ視察に行っておられた留守番の10日間には、広範囲心筋梗塞や急性大動脈解離、2例の胸部大動脈瘤破裂を含む超重症の急患が6例も発生し、もちろんその他にも予定の心臓手術、大動脈手術などもあったため、普段よりずっと多くの長

時間手術（9時間以上の手術も3例）をこなさなければなりません。また、ひろっば先月号で紹介した「心臓血管ウエットラボ」の準備もこの頃に重なりました。重症患者さんの場合は手術も大変ですが、術後管理も大変です。この期間に朝4～5時に呼び出されたのが2回、夜中に呼び出されたのが1回、昼間からぶっ続けで深夜もしくは翌朝まで手術をしたのが4回。10日間の時間外労働は71時間で、それ以外に時間外にカウントされない当直を2回こなし、当直の日も一度は真夜中すぎまで緊急手術をし、その後も寝ずの術後管理をしていました。1ヶ月あたり80～100時間の時間外労働が過労死認定基準だそうですので、それをはるかに凌駕するレベルだったことになりませんが、目の前に命の危ない患者さんがいるのに逃げ出すわけにはいきませんし、ウエットラボでは他施設からもたくさん御招待しているのに準備の不足による失礼がっはいけません。そんなわけで、発表

のスライドはなんとか作り上げていたものの、話すための原稿を作成することはできませんでした。よって、ソウルに着いてまず行ったことは、ご飯も食べずにホテルでひたすらに寝ること。そして、発表の前日によく発表原稿を作成しました。本当は観光もしたかったのですが、とてもそんな余裕はありませんでした。楽しく焼肉でも食べたかったのですが、食べたのは毎日ビビンバばかり・・・(泣)。

しかし、発表はスムーズにいき、質疑応答にもきちんと答え、充実した結果に満足して帰ってくることができました。さすがに今度ばかりは自分で自分を褒めてやりたい！！。海外には桁違いの手術数を誇る大規模センターもありますが、当院は日本国内では手術件数はかなり多いほうに入りますし、手術成績も世界に誇れる、というより、リードできるレベルにありますので、少しずつでも外に向かってそういった発信をしていければと思います。

安全運転管理者からのお知らせ

交通安全のための「標語」決まる

近森会安全運転管理者 森 士幸（施設用度課課長）
和田 廣政（第二分院事務長）

近森会グループ安全運転目標

- ①一時停止を守ろう
- ②車間距離を十分とろう
- ③一日一善ゆずりあい

近森会グループの今年の安全運転目標、いわゆる交通安全のための「標語」がこのほど決まりました。

近森会は救急車や患者さんの搬送用車両、訪問看護のための車両などを合わせると40台の車両を保有しており、また、通勤に車両を使用している職員も少なくありません。

近森会は安全運転管理モデル事業所に指定されており、これまでも業務用車両運転者を対象にした安全運転の教育や啓発活動を行ってきましたが、今後は近森会グループ全職員を対象とした、交通安全運動を推進していきたいと考えております。

まずはじめに、今年の近森会グループの安全運転目標（標語）を作りました。職員の皆さんも毎日の運転の前に復唱し

森 士幸 和田廣政



て、安全運転には充分心がけてください。一旦事故が起きてしまうと、加害者、被害者を問わず、時間的にも金銭的にも、たいへんな損失を被ります。自動車や二輪車だけではなく、自転車に乗る場合や歩行者としても交通ルールを守りましょう。

第3回近森病院／高知赤十字病院

合同パス大会

近森病院整形外科科長
クリニカルパス委員会副委員長 西井 幸信



閉会の挨拶をする高知赤十字病院の院長開発展之先生



1/16、コンフォートホテルにおいて第3回近森病院・高知赤十字病院合同パス大会が開催されました。第1回

はPEGのパス、第2回はACSのパスであり、両院共通の疾患に対してベンチマーク形式で行われましたが、今回は初めて両院が異なる疾患のパスを提示する形での開催となりました。

前半は近森病院が膀胱碎石術のパス、高知赤十字病院が幽門側胃切除術のパスを提示する形で行われ、後半は両院のパス委員会のあゆみ、現状と問

題点、今後の取り組みなどについての発表でした。

参加者は近森病院から101人、高知赤十字病院から67人、他施設から23人、合計191人でした。前回と比べるとやや少ない参加人数ではありましたが、フロアからの質問も活発に行われ、積極的な討論ができました。

クリニカルパスの導入は近森病院が2000年4月、高橋委員長のもと、「まずは各科1疾患パスをつくる」という目標で始まり、「パスは効率的な医療マネジメントツールである」という考え方で作成運用し、現在は55疾患67種類に至っています。一方、高知赤十字病院はその翌年から導入されていますが、導入時に現在とほぼ同じ数のパスが作成されました。

後列左から近森病院の西井幸信整形外科科長（パス副委員長）、西岡心大臨床栄養部主任（管理栄養士）、片岡真一泌尿器科部長、高知赤十字病院の開発展之院長、浜口伸正第一外科部長・呼吸器外科部長（パス委員長）、事務谷早恵子さん、川島加奈栄養士課係長（管理栄養士）、近森病院の久保聡美本院看護部長、前列左から同じく三好奈央3階東病棟看護師、吉田ひとみ泌尿器科外来看護師、濱田真夏薬剤師、医事課長山有里、高知赤十字病院の谷田信行第一外科副部長、横川綾子南館5階病棟看護師



現在、パスの数、使用率は両院ともほぼ同じですが、両院のこれまでの経緯の違いを知ることができ、また両院のかかえている問題点や今後の課題が浮き彫りにされたと思います。5月には国立高知病院との合同パス大会も予定しており、パスという手法を使って引き続き医療水準や医療システムの向上に向け貢献していきたいです。

第63回地域医療講演会

平成22年2月19日(金)
午後6時から
管理棟5階会議室にて

演題
「腹腔鏡を使った手術の実際」
講師
群馬大学大学院病態総合外科学
准教授 浅尾 高行 先生

腹腔鏡下手術は胆嚢摘出術において定着してきましたが、最近では胃癌、大腸癌、その他の消化器領域の手術にも応用されています。

今回は、いろいろな手術術式や器具を考案し、活躍されている群馬大学の浅尾高行先生をお迎えして、最新の腹腔鏡下手術に関する講演を予定しております。

消化器外科のみならず、開業の先生方、看護師など、コメディカルにもよくわかるお話をお願いしております。多数のご参加をお待ちしております。

近森病院副院長／外科部長 北村龍彦
申込先・地域医療連携室 内線 2220

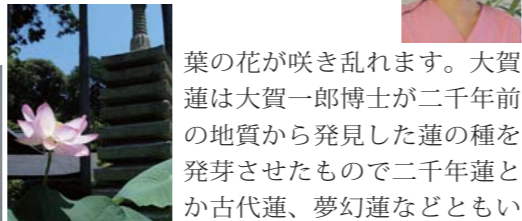
私の趣味 笑い地藏

右は大豊町の定福寺大賀蓮、下は同じく六体の木彫りのお地藏さま



私の今いちばんの趣味はお寺巡りです。去年、心に残ったお寺があるので紹介したいと思います。それは、私の故郷大豊町にある定福寺という古刹です。夏には大賀蓮が咲き、四季折々万

葉の花が咲き乱れます。大賀蓮は大賀一郎博士が二千年前の地質から発見した蓮の種を発芽させたもので二千年蓮とか古代蓮、夢幻蓮などともいわれています。



たまたま蓮の花を見に行ったことで、素敵なお地藏さまに巡り会いました。六体の木彫りのお地藏さまで、鎌倉時代初期の作と伝えられています。なんと、そのお地藏さまは笑っているのです。地元では「笑い地藏さん」として親しまれています。

「笑い」は遙か昔より緊張をほぐし、心を開かせる働きを持ち、その笑いは我々に「やすらぎ」と「安心」をもたらしてくれます。そして、その笑顔は時として患者さんの笑顔と重なります。看護師として私も「笑い地藏さん」のお心を大切にしたいと思っています。ぜひ機会があれば、一度お会いしに行ってみてください。



近森病院 6階東病棟 桑名 真由美

「静と動」のバランスがとれた実践派

化学の専門性を活かし仕事人生スタート

父上が国立高知高専工業化学科の第一期生ということが主な理由で、啓嗣さんも同じ道を志した。卒業後は一部上場の大阪の企業に就職し、化学系の研究職の道を歩み始めて丸6年。順風満帆の研究者は、田舎の長男坊だから、いずれは家を継ぐことになる、生まれ育った土佐市の実家に帰ることを決意し、性に合う気に入った仕事だったが研究職を断念する。

初志貫徹で、業務は再び…

その後、いまから1年3ヵ月前近森会に就職するまでの、9年半に亘るド根性生活が始まることになる。そして仕事人生のスタートを切った化学系の研究者のような仕事に、今日また診療支援部員として初志貫徹で携わっている、というのが今回のルポの眼目である。

元気の余ったオンちゃんたちとの日々

高知へのUターンを期に、何か資格を取りたいと思い、歯医者が親戚に居たこともあり、歯科技工士に挑戦することにした。そのための夜学の授業時間を逆算すると、午後4時終業の仕事なら正社員として、妻も三人の子どもも養いつつ資格が取れると考え、大規模青果商に就職。朝まだ暗いうちから弘化台の市場に、仕入れ担当の社長とともに通ったそう。その3年間は山崎さんには異色の体験となった。「2トントラックや重機を運転し、何十キロの荷物を扱ったり。それまでどちらかと言えば、静かなホワイトカラーの人たちに囲まれて仕事をしてきたから、元気が余っているような荒々しい市場のオンちゃんたちとの毎日は、しんどいけれど本当に新鮮だった」と振り返る。

Uターンは資格と専門性の両方を活かし

3年間で予定通り資格を取り、青果商は最初の約束通り円満退社。歯科技工学校の先生の勧めもあり、歯科材料メーカーで、高知県内にも研究所を持つ企業に、「化学の経験と歯科技工士の技術の両方が活かせるならば」と、本人も納得して就職。第二の研究者生活が始まる。

最初の3年間は実験に明け暮れる毎日だった。歯科材料は国の認証許可が必要なため厚生労働省とのやり取りも多

一見は至って物静かだが、ここ一番ではド根性を示す実践派



く、データの蓄積は求められる前に日頃から心がけるべきことや、実験自体の細かいノウハウを積み重ねる大事さを、身をもって体験した。片道45キロを1時間半かけて通勤し、毎晩11時過ぎまで実験に没頭する。

経産省選定「ものづくり日本大賞」受章

面白いことをやっていたら、「仕事」というよりも、まるで自分の趣味の世界に没頭するように頑張れるのだろうが、その成果が経済産業省選定の「ものづくり日本大賞」第2回の受賞者に選ばれ

患者さんのための図書コーナー“近森文庫”のご案内

当院では、病気の治療に日々向き合われている皆様に、治療とは別に何か癒される空間・時間をご提供できればと考え、患者さんのための図書室、完全開架式の“近森文庫”を新館2階に開設しています。

開設当初300冊だった蔵書数も、当院スタッフや患者さん等から図書寄贈のご協力を得て、1年半で4倍の約1,200冊にまで増えました。蔵書内容も、読みやすい小説や、元気が湧いてくる自己啓発本、歴史、美術、コミック等、大変充実して参りました。

外来の待ち時間等、空いた時間がありましたら、どうぞ一度お越し下さい。気になる一冊があるかもしれませんよ。また、入院患者さん及び付き添いの方には、病室への本の貸出も行っております。貸出ノートに記入するだけなので、どうぞお気軽にご利用下さい。

経済産業省選定の、製造生産現場を担う優秀な人材を対象とした「ものづくり日本大賞」の第2回受賞者に選ばれ、「四国経済産業局長賞」個人賞を受ける際の山崎啓嗣さん（2007年8月）



たことは、大きな励みにもなったようだ。そんな企業戦士生活を送ったためか、男子たるもの仕事は夜遅くまでウンウン唸って頑張るべき、というイメージが強いようだ。大好きな仕事で全霊をぶつけてやれたが、余りにも通勤時間が長く、介護の必要も出て来たりして、断念。

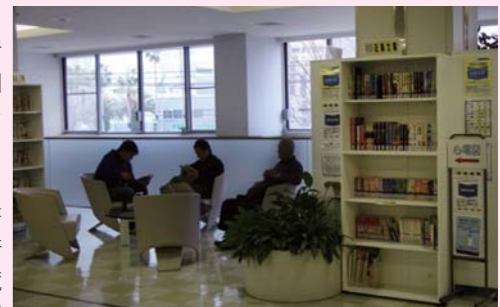
そして、近森会に就職し、自宅からは随分近くなった。

意欲と腕前でオフィシャルカメラマン

仕事の虫のような診療支援部の寺田文彦部長のもとで、同じように机にかじりついているという印象を持つ同僚が多いのではないだろうか。

地域医療講演会など勉強できる会には全部出席して早く医療の仕事覚えたいという意欲と、カメラの腕前が買われて、いま近森会グループのオフィシャルカメラマンも務める。さらに、今年の夏のよさこい祭りに向けては、「よさこいプロジェクト実行委員会」の委員長として、その有り余るエネルギーを思いきり発散、充実した毎日が過ぎている。

図書室 西川 菜穂





娘に夢中!

管理部総務課 山本 友里



子どもってどうしてこんなに可愛いのでしょうか? 愛しいという言葉がまさにぴったりの存在です。

この写真は娘(花寧ちゃん/平成19年8月27日生まれ)が2歳のときに撮ったものです。最近では、カメラを向けるとポーズを決めてきたりして、母的にやや微妙なんです。

このときは自然な姿が撮れました。物事に真っ直ぐに向かっていく姿勢、小さな発見も一生懸命教えてくれる娘



に、見習うことが多い毎日です。

寝顔を見ると思わず寝息を嗅いでしまうほど可愛い。当分、二人目は考えられません!

図書室便り (2009年12月受入分)

- ・脳MRI 2 代謝・脱髄・変性・外傷・他 / 高橋昭喜 (編集)
- ・血管無侵襲診断テキスト / 血管診療技師認定機構、血管無侵襲診断法研究会 (編集)
- ・病気がみえる Vol.2 循環器 第2版 チーム医療を担う医療人共通のテキスト / 医療情報科学研究所 (編集)
- ・健康保険組合 経理事務の手引 / 法研 (編集)

《寄贈本》

- ・MEDICAL ONCOLOGY A COMPREHENSIVE REVIEW / RICHARD PAZSUR, MD (編集)
- ・がん疼痛を緩和しよう! 2002 Supplement / 武田文和 (他監修)
- ・オピオイド研究の進歩と展望 / 鎮痛薬・オピオイドペプチド研究会 (編集)
- ・深在性真菌症の診断・治療ガイドライン 2007 / 深在性真菌症のガイドライン作成委員会 (編集)
- ・維持期リハビリテーション 生活を支えるリハビリテーションの展開 / 日本リハビリテーション病院・施設協会 (編集)
- ・DPCと病院成長の軌跡 / グローバルヘルス研究所 (編集)
- ・コトラーに学ぶ医療マーケティング - こころの経営 - / 西松空也

《別冊・増刊号》

- ・別冊・医学のあゆみ アトピー性皮膚炎 / 古江増隆 (編集)
- ・透析ケア 2009年冬季増刊 患者に聞かれても困らないナースが知りたい透析患者のくすり Q & A64 / 平田純生 (編著)
- ・呼吸器ケア 2009年冬季増刊 呼吸サポートチームのための呼吸管理セーフティBOOK この1冊でRSTの安全力アップ! / 鮎川勝彦 (監修)

お知らせ

バレンタイン献血

平成22年2月10日(水)

午後12時から5時まで

近森病院新館1階フロア水槽前にて

編集室通信

◆職員旅行もいよいよ終盤ですが、近森会グループの職員旅行は型破りですよ。人数もさることながら旅行先が実にユニークです。今年度の変わり種は、エジプトとフィンランドですが、「職員旅行でオーロラ観測に行く」と告げると大抵はキョトンとされます。(当然ですよ。聞いたことないもん!) 理事長♥ありがとう♥ (にゃーご)

近森会グループ

外来患者数	18,053人
新入院患者数	792人
退院患者数	817人

近森病院

平均在院日数	15.43日
地域医療支援病院紹介率	89.51%
救急車搬入件数	445件
うち入院件数	227件
手術件数	417件
うち手術室実施	277件
→うち全身麻酔件数	154件

2009年
12月の診療数

企画情報室